

西隆寺の調査

—第378次

はじめに

調査地は近鉄西大寺駅の東に位置し、西隆寺南面回廊の外側に当たる。近年再開発が進む地域で、今回の調査もビル建設に伴う事前の調査としておこなった。調査地にはすでに撤去を終えた建物基礎が残っており、基礎の間の遺構残存部分を6カ所に分けて調査した。面積は93㎡。調査期間は2004年10月1日から10月15日である。

基本層序

基本層序は造成土、奈良時代の瓦を含む整地土である暗灰色粘質土と暗褐色砂質土、地山である灰色粗砂の順に堆積している。暗灰色粘質土と暗褐色砂質土は地山の標高が低い部分で確認した。遺構は整地土および地山の上面で検出した。検出面の標高は71.0m前後である。

検出遺構

土坑と柱穴42基、溝6条を検出した。遺構の所属時期は古墳時代前期と奈良時代以降に分けられる。SK980は調査区北寄りで検出した不整形の土坑。埋土からは西隆寺の所用瓦を含む大量の瓦が出土したことから、寺の廃絶に伴う廃棄土坑と考えられる。SX981は小型の柱穴。埋土から古墳時代前期の小型丸底土器1点が出土した。

出土遺物

調査区内からはコンテナ15箱程度の遺物が出土した。

大半は奈良時代の瓦で、西隆寺所用瓦である軒丸瓦6235C、6236D、軒平瓦6761A、鬼瓦1点、熨斗瓦1点、刻印付き平瓦1点などが出土した。土器は奈良時代の須恵器、土師器のほか、古墳時代の土師器が出土した。

まとめ

今回の調査地は中心伽藍である回廊の外側に位置していたため、西隆寺に直接関わる遺構を検出することはできなかった。多数検出した柱穴や溝は正方位に乗らず、古墳時代の遺構である可能性が高い。これらの西隆寺下層遺構は、北東に展開する佐紀盾列古墳群の造営主体を探る重要な手がかりとなるであろう。（豊島直博）

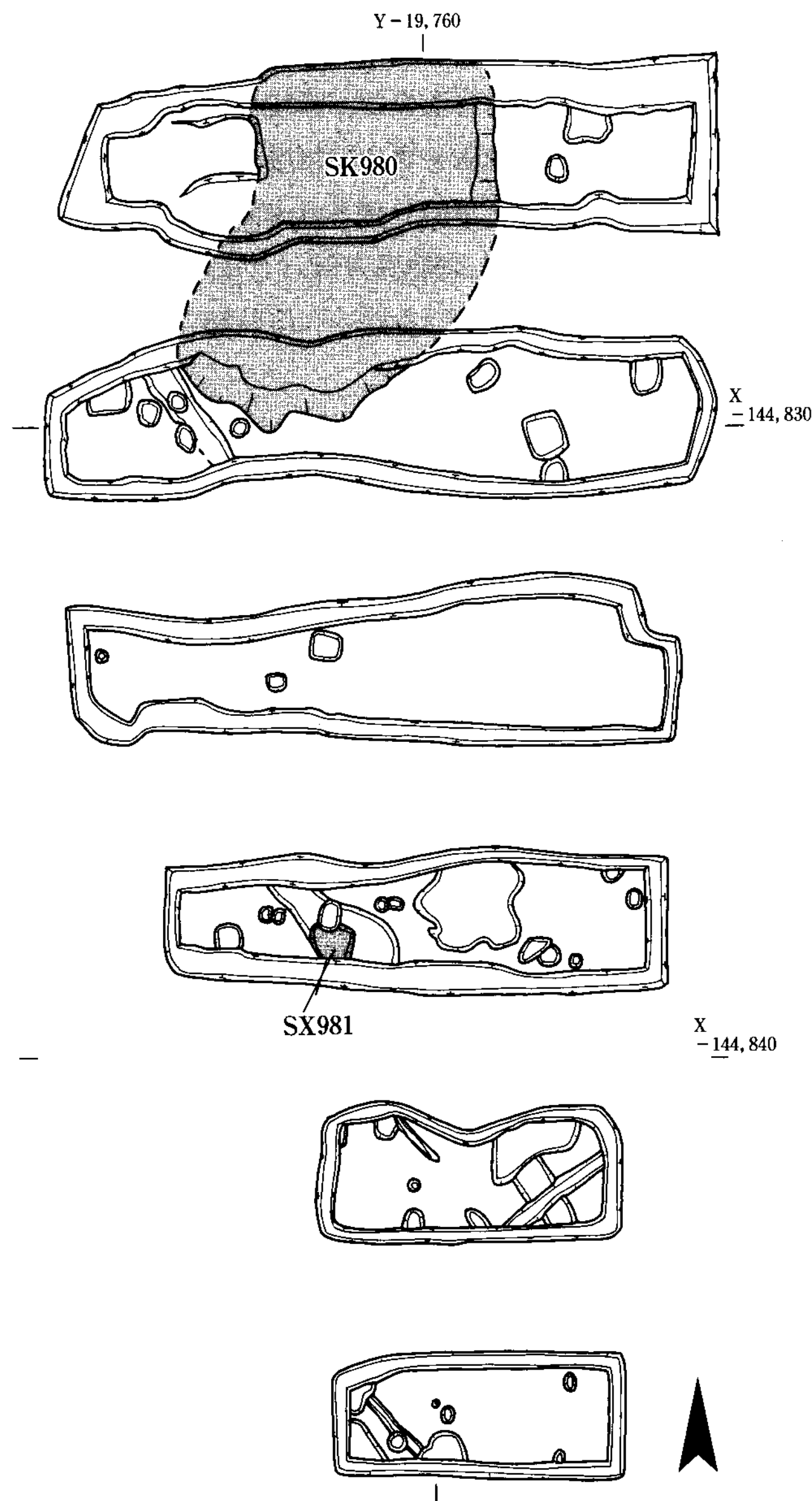


図172 第378次調査区遺構平面図 1:150

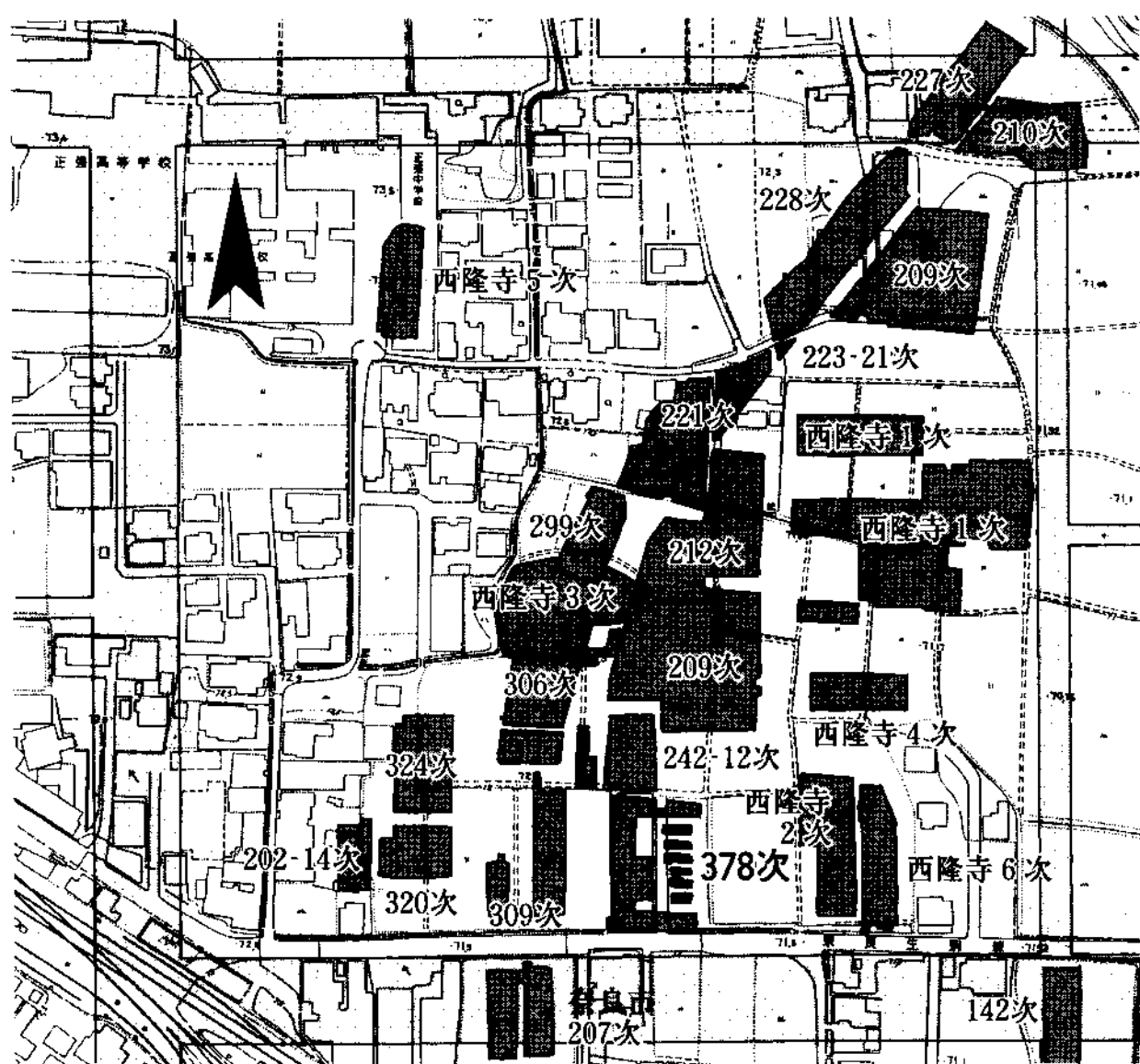


図171 第378次調査位置図 1:4000